

# 東 丈 夫・溝 淵 貫 一・名 越 規 郎： 黄 耆 の 生 薬 学 的 研 究 (第 1 報)\*

Jobu HIGASHI, Kan-ichi MIZOBUCHI, & Kiro NAGOSHI:  
Pharmaceutical Studies on "Huang-ch'i." I.

黄耆は神農本草経上品で本経には「主癰疽久敗瘡排膿止痛，大風癰疾，五痔鼠瘻，補虛，小兒百病」，別録には「婦人子藏風邪氣，逐五藏間惡血，丈夫虛損五勞，羸瘦止渴，腹清洩痢，益氣利陰氣」など見え，千金翼方の用薬処方には「治風，益氣，鼠漏并痔，女人寒熱疝瘕漏下，癰腫」をあげ，薬性論でも「治発背内補，主虚喘腎衰耳聾療寒熱」と述べているが，更に日華子には「腸風血崩帶下赤白痢，産前後一切病，月候不勻，消渴痰嗽，并治頭風熱毒赤目等」とあり，主として諸瘡や補精強壯の薬とされたほか婦人病や感冒などにも用いられたものようである。

産地として別録には「蜀郡山谷，白水，僕中」と四川および陝西をあげ陶弘景も「隴西，叨陽，黒水，宕昌，蚕陵，白水，蜀中」と四川および甘肅の地をあげ，古くは西北各地の産品が賞用されたことを示し，孫思邈は「関内道原州」と記し，蘇敬も「原州，華原」など甘肅，陝西産を最高に推しているが蜀漢のものは用いずと云い，更に「宜州，寧州」など南方のものをあげ，蘇頌は「河東，陝西」と記し山西産が陝西産と並んで重んぜられたことを示している。このように産地も時と共に移動し宋以後は山西産を以て最上とされたりしく，蘇頌はその皮の破折面が綿の如きものを綿黄耆としているが，陳承はこれを駁して山西の綿上に出るものを以て綿黄耆とし，清の李中立（本草原始）や郭佩蘭も同様に綿上産を以て最上品としている。

植物について蘇敬は「此物葉似羊齒或如蒺藜独茎或叢生——枝扶疎紫花根如甘草」，蕭炳は「出原州華原谷子山花黄」と云い，更に蘇頌は最上品とされた綿黄耆について「枝薜去地二三寸，其葉扶疎作羊齒狀，又如蒺藜苗，七月中開黄紫花，其實作莢子長寸許——其皮折之如綿，謂之綿黄耆，然有数種云々」と述べ白水耆，赤水耆，木耆などの名をあげており，当時すでに数種のマメ科植物がこれに充てられていたことがうかがわれる。その中で木耆は劣悪品とされていたらしく，日華子には「木耆——力微於黄耆遇闕即倍用之」とあり証類所引の雷公炮炙論には「凡使勿用木耆」と見えている。

これを要するに中国で古来用いられた黄耆はただ1種の植物ではなく従つてその同定は甚だ困難である。

次に本邦では古くは文献の徴すべきものがなく，奈良期の出雲国風土記にも黄耆の名は見られないが平安期に入ると延喜式の諸国進年雑薬に黄耆は山城，伊勢，尾張，参河，

\* Pharmaceutical Faculty, Tokushima University, 1-chome, Sho-machi, Tokushima-shi, 徳島市, 徳島大学, 薬学部.

第 2 報は薬学雑誌投稿中。

甲斐、相模、常陸、近江、上野、越中、播磨、備前、備中など13ヶ国から合計82斤6両が記録されており、このような国産品はもつと古くから用いられていたものと思われる。この国産黄耆は疑いもなく本草和名や和名鈔に「加波良佐々介」「夜波良久佐」と記されているものであろうがそれがどのような植物であつたかにわかに定め難い。

江戸期に入つて広益本草大成、日本賀濃子、和漢三才図会、片玉六八本草、本草綱目啓蒙などに「富士黄耆」の名が見られるが何れも下品とされており、松岡恕庵(用薬須知)は木黄耆に北国に産する「莖葉堅クシテ木ニ似、葉ニ有毛」のものと関東に生ずる「羊齒葉」のものと2種あり、共に人家菜園などに多く之を植えると云い、更に綿黄耆は「京都北山ノ中間有之、東国ニ是ヲワタ黄耆ト呼ブ」と叙べているが、小野蘭山(啓蒙)は「京師北山中ニ生スルモノハ葉ノ形槐葉ニ似テ莖柔弱直立スルコト能ハス地ニ偃シテ蔓藤ノ如シ、夏月葉間ニ花ヲ生ス浅黄色」と云い、飯沼慾斎(草木図説)はこれにモメンヅルの和名をあてている。一方香川修徳(一本堂薬選)も邦産品の一つとして今日モメンヅルと考えられる植物をあげ、富嶽黄耆は恐らく本草綱目中に蘇頌、雷公が云う所の木耆であろうと述べている。蘭山はまた「今広島種ヲ河州和州ニ栽テ大阪ノ薬舗ニ出ス偽テ唐種ノ黄耆ト云、根柔軟ニシテ白肉黄心舶来ノ者ニ異ナラス味甘厚上品ナリ」と云い本種は増訂草木図説にヒロシマワウギ *Astragalus hiroshimanus* Makino の名があてられている。このほか飯沼慾斎は白山に多産するという「立山黄耆」について記しているがこれについて牧野博士は「是はイハワウギと同名にして、*Hedysarum esculentum* Ledeb. の異名あり」と補注されている。

以上のように江戸期における和産黄耆は各地のものが用いられその植物も単一の種類ではなかつたが、薬徴に「漢土朝鮮本邦皆産也、漢土出綿上者、以為上品、其他皆下品也、其出朝鮮本邦者、亦皆下品也、今華舶之所載而來者、多是下品不可不辨也」と云い、薬品手引草に「朝鮮ハカタクタシ和ハ至て色白シ用ルニタエズ」、啓蒙に「舶來時ニヨリ善悪アリ朝鮮ヨリ來ル者ハ味微苦シ良ナラス」などとあるように中国や朝鮮からの渡來品も一様でなく、従つて内外多種多様の黄耆が市場に見られたものと推定される。

次に現代の文献を見るに A. Tatarinov は中国産黄耆の原植物として華北に普通に見られるクララ *Sophora flavescens* をあげ、P. Smith は *Sophora tomentosa* を充てたが、Gauger は *Astragalus* 属の植物と云い、この説は後に A. David により確められた。即ち彼は南蒙古旅行における報告書の中でマメ科に属する巨大な草本性植物 *hoangtchy* について記し、その根を中国に送つたので、A. Franchet はこれを *Astragalus hoangtchy* としたと云う。また Bretschneider<sup>1)</sup> は湖北における黄耆として *Astragalus Henryi* をあげている。

1) Bretschneider: "Botanicon Sinicum" III, 17 (1895).

市場の黄耆については清国海關通過藥品表 (1889) に天津, 宜昌, 漢口より輸出し, 産地は満洲, 山東, 四川, 陝西などとしているが, Port list では数種のをを区別しており, これらは恐らく別々の植物からなるものとされ, 宜昌からの黄耆は白耆および他種のもこと云う。その後 G. A. Stuart<sup>2)</sup> は中国産の黄耆を *A. Hoangtchy* とし, 当時中国の港から積出された多量の黄耆は産地によつて数種に区別されていたことを伝え, 更にそれらの中には *Sophora* 属の根も混入することがありうると述べている。

中尾, 木村博士ら<sup>3)</sup> は中国産黄耆の原植物として *A. Hoantchy*, *A. Henryi*, *A. reflexistipulus* および *Sophora tomentosa* などあげ, *A. Hoantchy* を以て正品とした。一方華中の植物を調べた F. L. E. Diels は *A. Henryi* を充てたが, 三浦氏はこれを否定しキバナオウギ *A. membranaceus* であるとしている。これに対し石戸谷博士<sup>4)</sup> は中国古代の本草に云う黄耆は *A. Henryi* またはその他の種類で三浦氏の云う *A. membranaceus* は後代に用いられた河北産の黄耆に相当するものと思われると述べ, また朝鮮産のものについては野生品と栽培品があり, 両者は *A. membranaceus* に属するが, 果実, 花および枝葉の形態を異にし, 各異なる変種に属すべきものと考えられると云い, 更にこの属の植物には種類および変種が多く, 今日中国において用いられる黄耆も恐らくは数種の *Astragalus* 属植物よりなるものと思われると記している。

また B. E. Read<sup>5)</sup> は中国産黄耆を *A. Hoantchy* および *A. reflexistipulus* とし産地として満州, 山東, 四川をあげているが, 山本氏<sup>6)</sup> によれば主産地は外蒙 (庫倫, 多倫) 並びに内蒙を主とし, 民国 26 年発行の「中国通郵地方物産誌」に載せられた産額として四川 10, 雲南 2, 河北 240, 河南 10, 山西 75000, 陝西 8, 甘肅 82, 綏遠 16 (単位 1000kg) を掲げ, このうち山西産の大部分は現在蒙疆晋北地方に属する渾源, 寧武の産と云う。また満州産は旧吉林, 奉天省下を主とし品質は劣等とされ, その他朝鮮から少量を出す述べ, 更に蒙古はすべて野生を採り, その他においては野生 (山黄耆) または栽培品 (植黄耆) を採ると云う。同氏は市場の黄耆について産地, 品質, 調製法などによる種別をあげ, その中で綿耆, 沖耆は栽培品であるとし, 野生並びに栽培品の形状について詳説しているがそれらの原植物にはふれていない。その後木島, 渡辺, 松岡氏ら<sup>7)</sup> はかつて上品とされた蒙古産の庫倫耆を模造したといわれる沖耆とその調製に用いられる烏拉葉について発表し, また木村, 木島, 丹氏ら<sup>8)</sup> は鮮満品は *A. mem-*

2) G. A. Stuart: "Chinese Materia Medica" 57 (1911).

3) 中尾, 木村: "漢薬写真集成" 第 1 輯 77 (1929).

4) 石戸谷: "北支那の薬草" 73 (1931).

5) B. E. Read: "Chinese Medical Plants from the Pen Ts'ao Kang Mu" 111 (1936).

6) 山本: 植研 18: 542 (1942).

7) 木島, 渡辺, 松岡: 生薬 1: 39 (1947).

8) 木村, 木島, 丹: "和漢薬名彙" 41 (1946).

*branaceus*, 華北産は *A. Hoantchy*, 華中のものは *A. Henryi* およびその他同属植物としている。

黄耆の原植物として従来文献に見られた植物は大略以上のものであるが、中国科学院植物研究所編輯の「中国主要植物図説 豆科」(1955) では 96 種に及ぶ *Astragalus* 属植物を記載しており、薬用に供されるものとしては *A. Hoantchy*, *A. membranaceus* の 2 種のほか *A. mongolicus* なるものをあげ、従来黄耆の一原植物と考えられて来た *A. Henryi* (秦嶺黄芪) は薬用とはされていない。本書は *A. Hoantchy* を「黄芪」とし産地として新疆、甘肅両省をあげ、花の色は「玫紅色或紫色」と述べており、これに対し *A. membranaceus* は「膜莢黄芪」と呼び花色は「白色」で分布は西康、四川、河北、山西、江西、東北としている。また *A. mongolicus* は「内蒙黄芪」と称し根は深長、花は「黄色」で産地は河北、山西、内蒙となっており、更に恒山山脉(河南、湖北、陝西省の境にあたり黄河より南の地にある)に沿って広く栽培し薬用にされると云う。本植物についてはなお中国科学院植物研究所編輯、崔友文編著の「華北經濟植物誌要」(1953) にも「黄芪 (*A. mongolicus* Bge.) 在山西綿綿黄芪、産我国北部(冀晋綏) 中薬用沿恒山山脉広有栽培」と見えている。一方 *A. Henryi* には完全な記載がなく、僅かに検索表によつてその形状を知りうるのみで、花の色は恐らく「黄色～白色」であろうと思われる。北川博士によれば *A. Hoantchy* の花は「バラ色または紅紫色」であり、*A. Henryi* は乾燥標本では「白色」らしく見られるとのことである。

以上を著者らの本草学的考察の結果と併せ考えると古代中国の黄耆はやはり新疆、甘肅方面の *A. Hoantchy* であつたらしく、その意味では中尾、木村博士らが本種を以て黄耆の正品としたことは妥当と考えられる。しかし宋以後の黄耆は山西産が最上とされ産地の移動と共に原植物も変つたものと思われる。山本氏によれば今日の綿耆は栽培品で概して長く往々振転して 1 m に達するとあり、これらの記載から見て山西産の綿耆こそ前記の「内蒙黄芪」*A. mongolicus* の根であろうと思われる。このような事情から *A. Hoantchy* に由来する生薬は恐らく今日では殆んど市場に出ていないものと推定され、また *A. Henryi* も実際に薬用に供されるとは認め難く、従つて現今の唐黄耆のうち最上とされるものは内蒙黄耆 *A. mongolicus* の根であると考えられる。

次に今日本邦で和黄耆として用いられるものは現在までの調査ではすべて富士山麓御殿場より出る品で、現地の業者間ではこれをムラサキモメンヅル *Astragalus adsurgens* subsp. *fujisanensis* の根と称しているが、著者らの研究の結果本種はイワオウギ *Hedysarum ussuriense* であることが判明した。なお和産黄耆として以前は富山県や石川県白山あたりから真黄耆なるものが大阪の市場に出たという記録も見られるが、その原植物は何であつたか現在不明である。終りに古文献の調査に当り御指導を賜つた岡西為人博士また御意見を寄せられた高橋真太郎氏に謹謝する。

### Summary

In this paper, the botanical origin of a crude drug obtained from underground portion of *Astragalus* or *Hedysarum* species, Huang-ch'i was discussed on the descriptions appeared in the Chinese and Japanese literatures.